ヒューマノイド（1）

伊坂 幸太郎

（三十歳の「僕」は、先輩社員との会話をきっかけに十数年前の同級生の言葉を思い出します。「僕」には中学生の頃、たわいもない話をする間柄のタクジという友達がいました。）

そもそもタクジと話すようになったのも、「人間の機能」の話題がきっかけだった。「恥ずかしくなる」機能について、だ。

その日、僕は登校中に恥をかいた。交差点の赤信号で止まっているとき、左前方に同級生らしき姿を見つけ、「アイコ、おはよう。」と声をかけた。相手が振り返り、それがアイコではなく、上級生だとわかったときには、ぞっとした。向こうはけげんそうに①眉をひそめていたが、僕は、「間違えました。」とも「すみません。」とも言えなかった。②取り繕うように髪の毛を触り、信号が切り替わるのを待つだけだった。そこを、タクジに目撃されたのだ。

からかわれるにちがいない、と覚悟した。けれど、彼は笑うでもなく、「どうして人間って恥ずかしくなるのか、前から不思議だったんだよね。」と真剣な顔で言うものだから、③驚いた。

「どういうこと。」

「だって、恥ずかしい気持ちなんて要らないじゃないか。誰かに迷惑をかけたならまだしも、人前で転んだだけでも恥ずかしくなる。恥をかくと、見捨てられたような気持ちになるし、自分の評価が地におちたような気分になる。そんな機能があって、何の役に立つんだろう。」

僕は困惑した。「恥ずかしさ」と「機能」を結び付ける人に初めて会った。

少しすると彼が、「あ、わかった。」と、うれしそうにこっちを見た。

「失敗を繰り返さないためかな。こんな恥ずかしいことはもうごめんだ、と思って、次には気をつける。そのための機能なのかも。」

「でも、大勢の前で名前を呼ばれただけでも恥ずかしくなるよ。失敗したときだけではなくて、目立っただけで恥をかく。」

「確かに。」タクジも認めた。少し考えた後で、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、④人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と宣言するように言った。

「え。」

「人間にとって、恥をかくか、かかないかというのは重要なことだろ。恥ずかしかった記憶はいつまでたっても、くっきりと覚えている。恥をかいたことで泣く人もいれば、怒る人もいる。そんなこともわかってくれないロボットなんて信用したくない。」

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「眉をひそめていた」とあるが、「眉をひそめる」の意味として適当なものを選びなさい。

ア　心配事がなくなってほっとし、明るい顔になる。
イ　不快な気持ちや心配の気持ちで顔をしかめる。
ウ　まるで動じず、表情を少しも変えない。

〔　　〕

(2) ――線②「取り繕うように……待つだけだった」とあるが、これは「僕」のどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　とても緊張(きんちょう)している様子。
イ　驚き慌(あわ)てている様子。
ウ　不安でおびえている様子。
エ　気まずくてうろたえている様子。

〔　　〕

(3) ――線③「驚いた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　「僕」が人違いをしたことにタクジは気づいていなかったから。
イ　「僕」のミスをからかった上級生にタクジが話しかけたから。
ウ　タクジが恥ずかしい思いをした「僕」を真剣に慰(なぐさ)めてきたから。
エ　タクジが真剣な顔で思いもよらない疑問を投げかけてきたから。

〔　　〕

(4) ――線④「人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする」とあるが、タクジがそう考えたのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　人間と同じような感情を持つヒューマノイドロボットを開発することで、人間の機能を改善することができるから。
イ　ロボットも人間の恥ずかしい感情を理解できるようにすることで、落ち込(こ)む「僕」を慰められると思ったから。
ウ　恥ずかしさは人間にとって深刻なものなので、人間と関わるロボットもその重要性を理解する必要があるから。

〔　　〕